

やみしい夜の句会報 第260号 (2026.2.8-2026.2.15)

参加者: クイズケ、ゆつたま、田中美蟲角、カオルル、しまねこくん、松本清展、汐田大輝、なさわい、汐田大輝、西脇伴貴、xxxotraapeldap、水星郎、天然石アクセサリーkiki's、ふくねつたかこ、宮坂変哲、片羽雲雀、舞風、奏かなで、霧雨魔理沙、山田真佐明、砂原妙々、笛地静恵、空野つみき、白木ま衣、砂のような佐井杜有、鈴木正巳、石原とつき、雨声、桑原雫、もみじ寝子、鮎田わさび、青海波、ナル、べるぼつゝのくわれたべる、岡村知昭、石川聰、つきのさかな、東ひいろ、非常口ドント、胡椒黒、不思議な話のアイン、まどけい織部ゆい、季川詩音、雪夜彗星、山羊の頭、山代甘倫、菊池洋勝、akao、スタ6251、白井沙漠、麦ちひる、水彩、安藤蜜豆、栗井ゆづる、朝暮(ナミ)、三明十種、よもやまさか、月波与生(六五名)

◆川柳・俳句

どこまでも馬を安全に死なせてしまう クイズケ

三度目のいないないで凍りつく クイズケ

内科医を興味本位に傷つける 汐田大輝

歌わない者を沈める石油缶 汐田大輝

凍夜の浣腸はいつも最後まで 菊池洋勝

竹馬だましたましこまざまあねさん 石原とつき

オマエモナーオマエモナーと夜凍る しまねこくん

背鳍まであるが鶯餅なのか しまねこくん

絶交の上書きをしに来る雪崩 しまねこくん

地動説一人唱へて夜凍る しまねこくん

一般のひとの怒りは雪ですか 胡椒黒

◆川柳・俳句

霜降りるどれかがきみの指だろう 黒胡椒

海苔搔くやシンドバンドの腰つきで カオルル
ニライカナイへの道は真つ直ぐ 青海波

雜音に挟まれてゐる少年誌 空野つみき

平常心はおまけのようなものだから 白水ま衣

故郷は月面都市の端のほう 宮坂変哲

今夜から冷凍保存するのび太 汐田大輝

凍る夜は静香の脈に触れてみる 汐田大輝
目に染みる泣きたい夜の欠けた月 なさわび

卵とじうどんの熱き春の闇 カオルル

味噌床に三年漬けている凍夜 佐井杜有

凍結したねるねるねを飾る アイン

*

にんげんをかえしツクヨミ秋刀魚焼く ゆうたま

立春や露店の古着買ふ女 田中美蟲角

凍鶴や群れを離れて夜をひとり 松本清展

義理チヨコ塚の守り人 Nichtraucherchen

ほどなく羽根が咲むと知る。 天然石アクセサリー kiki's

サボテン枯らすテクニシャン ふくらうたかこ

薄霞チヨコで包んだ傷とキス 片羽雲雀

トラウマに苦しめられる日は続く 霧雨魔理沙

かぎ裂きの試写室は中島みゆき 西脇洋貴

あらすじの裏道を行き凍みる夜 山田真佐明

春雪や穂高の川に鱒の影 鈴木正巳

夜のいてつくたてつく姉の亞種と握手 石原とつき

おきぬけの 君を抱きよせ ひとしきり 桑原雑

違います下痢は象ではなくて僕 岡村知昭

問答無用モン・ドール 石川聰

会えなくて今日はさみしいちよこれいと 東ひづる

別れとはマフラーが長くなること 季川詩音

ぬくもりと静けさの雪を探す夢 雪夜彗星

穴バケツ 水が入つても 穴から流れる 山代甘倫

冬薔薇やがて一人になる一人 aka

デジタルの時代にあえて詠む凍夜 まどけい

青星が光れ光れと急き立てる 水彩

残雪に凌辱されてゆく正氣

安藤蜜豆

春だって呼ばれて二月は透明 朝暮ミナミ

たましひの碎けし音と春の雪 三明十種

*

真つ白はリバーシブルなヤーレンズ 月波与生

◆ 短歌

もう私、用無しなんだと思います ピエロの仮面は笑つて
います つきのさかな

凍る夜は音も涙も凍てついてちりり抗つ心臓を抱く もみ
じ寝子

各々が氷砂糖を持ち寄つてフロリダと消ゆ梅酒の夜宴 鮎
田わさび

*

聞いてよとか細く放つ言の葉がストウブの香の中空に浮く
xxodarapelddap

焦点の合わぬ目でみる者だけにオールを預け企画書に乗る

水の眠り

爪先が凍り付くよな寂しさはこの心臓の渴きのせいだ／＼

七澤銀河

興醒め…自らは凸凹踊る火星人ではないと知る夢 月階

柚

焦げつきし鍋の底より剥がれずにあなたを待てば夜だけが
煮える あづみのマルコ

できるだけ手遅れにしようビックリマンチョコを買つたり

ワイン飲んだり 銀星星郎

無いものを欲しがるのつてそんなにさ 驄目かなそうね そ

れでも私 舞風 奏

風花の消ゆる速さを知りながらなお差し出せる心を選ぶ

砂原妙々

円周率が循環小数となる夢を見た朝の町の周縁 笛地静恵
落ちた首はつぼらかしにしておいた凍夜はぼくを解離させ
てく 砂のような

出会いありてテーブルに着く偶然性小さな悪と小さな戦略

雨声

晴れの海こんな夜でも穏やかで ニライカナイへの道は真

つ直ぐ 青海波

一人きり無為に過ごして迎う夜湯船で抱く寄る辺なき足
ナル

眩しく光る あの星がきみだつたら 良いのに また会える
から ペロボッコ

凍空にいっぱいの泡静止した街で夜更けに孤独を冷やす

非常口ドット

これだけは手放せなくて透明なハコだつたのに色が被さる

織部ゆい

痛みは、ね MAX10の5になつた 長い旅だね飛行したいよ

山羊の頭

残雪を踏みしめなおす足の下 ひび割れながら春は息する

麦ちひろ

つらぬいて岸に広がる海鳴りを吹きすぎる風今日はどこへ
と 粟井ゆづる

◆詩・短文

夜中でも太陽が輝いて
輝く白銀の大地

私の恋を

祝福してゐる気持ちがするわ (スタ 6251)

眼を閉じて横たわっている
さみしく鳴をしている

ひたひたと水が浸食していく音だけがする

昔に帰りたいとは思わない
あの人になりたいとは思わない

ただ今が耐えられない

わたしはわたし以外の形になれない
ノックして通り過ぎていく人たちを
引き留めることはできない (白井沙漠)

◆作品評から

絶交の上書きをしに来る雪崩 しまねこくん
（大切なことだからね。よもやまさか）

円周率が循環小数となる夢を見た朝の町の周縁 笛地静恵
（循環小数、懐かしい言葉ですね。これは悪夢なのでし
ょうか。しかも円周率とは。きっと數字者同士が議論して

たのではないでしようか。「循環する」「いや、するわけないだろ」つて。(季川詩音)

究極の受け身で生きてる君が僕を好きなら好きだし嫌いなら嫌いつきのさかな

～「君が僕を好きなら……」から面白いがその方が楽だ、し来傷つかない、で恋愛受け身人間が増える。結論先送り、ということではあるのだけど。(月波与生)

夜に見る微笑みの国の自殺率 クイスケ

～総理になつた高市早苗はよく笑う。面白くない時でもまずは笑顔から入る。作り笑いだろうが笑顔は人を安心させる。一億総笑顔。これからこの国は微笑みの国になるだろう。(月波与生)

睫毛しか青信号に気づかない 蔭一郎

～こういう句を書けるひとは繊細なんだろうと思う。睫毛の気持ちとか考えたこともないわたし。(月波与生)

春近し長き手足の小栗旬 カオルル

～固有名詞を入れる句は注文相撲みたいなもんでハマれば気持ちいいがズレるとどうしようもない。小栗旬はハマっていると思う。(月波与生)